

1 学校としての取組のまとめ

(1) 研究主題

「耕心」 知恵を耕し、心を耕す授業づくり
～確かな学力の充実と向上をめざして～

<研究の目標>

「すべての教科で言語活動の充実の視点を持った授業の展開を工夫し、学習基盤の確立と確かな学力の充実と向上を図る」

<取組の概要>

平成 21 年度から実施している具体的な取組は次の四点である。

① 授業と家庭学習のリンクの工夫

- ・学習習慣の充実
- ・課題の工夫
- ・自己評価ツールの効果的な利用

② 習得型授業の工夫

- ・本時の目標や評価基準の明示
- ・学習課題や学習過程の明確化
- ・「教えて」考えさせる授業づくり

③ 活用型授業の工夫

- ・活動的
 - ・応用的
 - ・発展的
 - ・プロジェクト的
- } な活用型授業

④ 授業改善プランの利用と研究授業でのチャレンジ

- ・指導者自身の授業改善の取組の振り返りと次のチャレンジ

(2) 取組内容

ア 研究主題を受けた特徴的な取組

本校は、平成 21 年度から本事業の指定を受け、指導顧問である大阪教育大学の木原俊行教授の指導助言のもとに、開発実践校として取組を進めている。昨年度を取組を通して、全教員が授業改善プランを作成し、教科ごとに設定した重点テーマに沿った実践を行い、公開授業及び校内研修会で相互に学びあい、次の実践に生かすという R → PDCA サイクルが定着し、「授業力向上」に向けて一定の成果を得た。一方、取組の課題として指導顧問の木原教授からは、せっかく作成した授業改善プランやそれに係る実践報告書などがただ提出しただけに終わってしまい、教員自身が自分の取組を振り返り、次のチャレンジにつなげていく手段として活用しきれていないという御指摘をいただいた。

そこで、2 年目となる今年度は、この点を改善し、より「授業力向上」「教師力向上」に資する取組にしていくために、次の三点を重点項目として年間計画を策定した。

① 各自の研究テーマに即した授業改善プランの作成とその形成的評価の工夫

- ・共通の重点項目から選択した研究テーマに沿った授業改善プランを作成する。
- ・授業評価の観点を整理するために授業チェックシートを作成する。
- ・授業チェックシートから選択した重点評価項目に関する取組を週単位で振り返って次週の実践に生かす「実践報告書」を作成する。

② 1 学期から公開授業週間を設定し、全員が公開授業を実施

- ・教科の枠を超え、研究テーマのジャンルが同じ教員同士で相互に授業を参観し授業評価を行う。(1 学期)
- ・重点評価項目を明示した様式で公開授業指導案を作成し、授業チェックシートにより評価

項目に沿った授業評価を相互に実施する。(3学期)

- ・全ての教員に研究推進の役割を果たしてもらうために、教科の枠を超えたプロジェクトチームを作り、研究授業の授業担当者への支援と指導助言を行う。(3学期)

③ 校内研修会の持ち方の工夫

- ・単なる教科内の実践交流会にとどまらず、授業改善についての新しい実践アイデアが提案できるような校内研修会になるよう、参加型協議、教科単位で協議、学年で協議などさまざまな形態を実施する。
- ・校内研修会の最後に必ず「次なるチャレンジの宣言」を行う。



校内研修における分散会

イ 取組の時系列

4 ～ 5 月	<ul style="list-style-type: none"> ・研究推進にかかる年間計画の提示(職員会議) ・個人研究テーマを具体的な取組①～③より選択して設定し、授業改善プランを作成 ・各学年で家庭学習に関する取組の計画立案 <p><第1回R→PDCAサイクル:前年度の実態をもとに1学期の授業改善プランを立てる></p>
6 月	<p>公開授業週間の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員相互で授業参観し、研究テーマに沿った授業評価の実施 <p>第1回校内研修会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人研究テーマと今回の授業でのChallengeについて分散会形式で研究協議 ・今後の授業改善へのアプローチ(次なるChallengeへの決意)宣言
7 月	<p>指導顧問訪問指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公開授業週間及び第1回校内研修会の成果と課題 ・今後の研究推進の方向性の確認(授業づくり及び授業評価の観点の整理と再構築の必要性と校内研修会の効果的な分散会の在り方) <p>授業評価の観点を整理するため、授業チェックシート(習得型・活用型)を作成</p>
8 月	<p>第2回校内研修会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1学期に作成した授業改善プランの実践報告(Check・Action)と2学期に向けてのChallenge宣言 ・4月に実施したベネッセ総合学力調査の分析 <ul style="list-style-type: none"> ①教科に関する調査(各学年各教科による分散会形式) ②意識に関する調査(各学年による分散会形式) <p><第2回R→PDCAサイクル:1学期の実態をもとに2学期の授業改善プランを立てる></p>
9 月	<ul style="list-style-type: none"> ・新たに作成した授業チェックシートの共通項目及び習得型又は活用型項目よりいくつかを選択して、2学期の授業改善プラン重点評価項目と個人テーマを設定 ・選択した重点評価項目により授業参観及び研修会分散会のグループ分けを決定
10 月	<ul style="list-style-type: none"> ・公開授業までの1ヶ月間、自分の選択した項目について「2学期の授業改善プラン重点評価項目の実施状況」を各自で記入し、毎週の週案とともに提出して自分の授業実践の振り返りを実施 ・公開授業指導案の作成(授業チェックシートの中から選択した重点評価項目を明示した様式を指定)
11 月	<p>公開授業週間の設定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・重点評価項目ごとに分けたグループのメンバーで相互に授業参観し、評価項目に沿った授業評価の実施 <p>第3回校内研修会(指導顧問訪問指導)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業チェックシートの共通項目へのChallengeについて全体会で研究協議(課題のある生徒へのアプローチの

	方法と授業規律の確保の方法) ・授業チェックシートの習得型・活用型の重点評価項目別グループによる分散会形式の研究協議
12月	2学期の授業改善プランの実践報告 (Check・Action) と3学期に向けてのChallenge宣言 <第3回R→PDCAサイクル: 2学期の実態をもとに3学期の授業改善プランを立てる>
1月	・公開授業までの1ヶ月間、自分の選択した項目について「3学期の授業改善プラン重点評価項目の実施状況」を各自で記入し、毎週の週案とともに提出して自分の授業実践の振り返りを実施 ・研究授業指導案の作成 (授業者を中心としたプロジェクトチームによる授業参観および事前研の実施)
2月	第4回校内研修会 (指導顧問訪問指導) ・研究授業 (数学・英語・家庭科) ・教員は自分のプロジェクトチーム以外の授業を参観し、授業者のChallengeについて分散会で研究協議

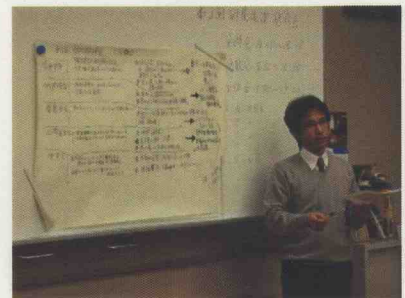
ウ 人材育成にかかわる成果と課題

平成21年度に本事業の指定を受けるまで「教師力向上」「授業力向上」に結びつくような校内研修会がほとんど行われていなかった本校であるが、2年間にわたる研究推進の取組を通じて「年間を通じて授業改善プランに沿った取組を実践しなければならない」という意識を全教員が持つようになったことがまず大きな成果である。学力調査などの分析の方法ひとつ、授業改善プランや実践報告書の書き方ひとつを取ってみても、校内研修会ごとに全教員の分が印刷製本のうえ配布されるので、回を追うごとに内容が充実したものになってきている。また、校内研修会の研究協議は昨年度より一貫して教科の枠を超えたグループ分けによる相互の授業参観をもとに実施しているので、同じ重点評価項目を選択していても教科の特性により異なったアプローチの方法に学ぶべき点が多いのも大きな成果であると言えよう。

エ 人材育成から考える組織の活性化の成果と課題

本校では本事業推進のために昨年度から校務分掌に「研究推進委員会」が設置され、教頭、教務主任、生徒指導主任、進学主任の他、学習連携部として各学年主任、授業研究部として5教科の教科主任を構成メンバーとして、取組の方向性や校内研修会の在り方について意見を交換しながら研究を進めてきた。研究推進委員会のメンバーは校内研修会では分散会の司会者であり、全体会では研究協議のキーパーソンでもある。彼らの積極的な意見交流から若い教員にも意見を出しやすい雰囲気づくりがなされ、教科の枠やキャリアの差を超えた学び合いができるようになりつつある。

また、6月と11月に設定した公開授業週間を軸とした取組では多くの書類を作成する必要があるため、必然的に教科内や学年内での意見交流が増え、授業改善の方策について教員自身がさまざまな方法を模索するようになってきたことも大きな成果である。



研究推進委員会メンバーによる分散会報告

(3) 成果を受けた今後の方向性

まず、今年度作成した授業チェックシートの効果的な活用法をさらに研究実践していくことが必要である。さらに、木原教授から指導助言を受けながら今年度実施できなかった外部機関と連携した公開授業と事後研修会の実施についても検討していきたい。

(4) 本事業に係る取組資料の説明

- ア 学力向上へのグランドデザイン 久御山中学校学力向上ビジョン
- イ 平成22年度第1学期研究推進個人研究テーマ一覧
- ウ 2学期の授業改善プランと実践報告の一例
- エ 授業チェックシート (習得型)
- オ 2学期の授業改善プラン重点評価項目の実施状況の一例
- カ 第3回校内研修会レジメ

2 管理職の視点から考える本事業の成果

(1) 人材育成の考え方の変容

学校教育の活動成果は、その担い手である教師の資質能力に負うところが大きい。よって、個々の教師の資質能力（教師力）を如何に向上させていくかは、学校運営において極めて重要な課題であることはいうまでもない。特に本校では、昨年度から「授業力」向上をその柱とし、焦点化した取組をしている。2年目となった本年度では、研究推進体制の整備、研究推進内容の充実、木原教授の指導助言等により、個々の教師の授業改善に対する意識の向上と具体的取組の前進が見られ、一定の成果があった。

本年度は、特に、全員が公開授業当日の指導案や、授業改善のための各自の研究テーマを提示し、実施改善状況を毎週報告することで、自分自身の指導方法について謙虚に振り返ることができた。

(2) 組織の活性化に向けた現状分析から考える自校の特色づくり

ア 教職員の意識

全員による2度の公開授業における指導案作成、その際の相互参観と評価シートにもとづく授業評価、週案に添付して提出する授業改善実施報告等の取組の中で確実に授業改善への意識向上が図られた。

イ 組織のシステムづくり

昨年度発足した研究推進部の位置付けを一層明確化するとともに、定期的な研究推進委員会開催を進めた。その中で推進委員のメンバーの役割分担や、メンバーによる他の教師への日常的な指導助言が行われることで、組織的な取組が一層推進された。また、相互評価や研修会当日の討議も教科の枠を超えた構成で行うことで、様々な視点からのアプローチを学ぶ場となった。

ただし、家庭学習の充実（授業とのリンクの工夫等）については、各学年及び個々の教師に委ねている部分が多く、組織的な対応という面からは、昨年度に引き続き課題である。

ウ 学校経営計画及び学校評価の変容

「教師力向上」教育実践力継承事業の指定の下、計画的に全ての教師が年度当初から具体的実践の発表の場を持ち、相互に学び合い、次の実践を進めるという「R→PDCAサイクル」が定着してきていることは、学校経営上の主要課題である人材育成について、成果があった。

学校評価に関しては、2度の公開授業週間を設定し保護者をはじめ地域の方々に学校公開をする中で保護者、学校評議員、PTAをはじめ様々な方から随時評価をいただく機会となった。また、現在集計・分析中の学校評価アンケートの項目の中で、保護者の方や生徒から授業に関する評価を受けることで、今後の取組みに生かせるものと考えている。

